

Newsletter of the British Council Japan Association

# BCJA Newsletter

No. 18, 19

June 30, 2003



## 会長就任のごあいさつ



British Council Japan Association  
会長 橋都浩平

2003年4月よりBCJAの会長に就任しましたので、会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

僕が会長に就任して最初に行った仕事は、前会長の瀬川彰久先生の訃報を役員の皆様にお知らせす

ることでした。このニューズレターの中の追悼文にもありますように、前会長の瀬川先生は4月16日にお亡くなりになりました。先生はご自分のご病気のことをすべてご存じでしたが、本当に最後まで力を振り絞ってBCJAの基盤の整備のために尽くされました。私も何とかBCJAのために微力でも尽くして行きたいと思っています。

現在、BCJAは大きな曲がり角にさしかかっています。その最大の理由はブリティッシュカウンシル(BC)の公的な奨学金が日本人に対しては支給されなくなったことです。ですからBCJAが従来の入会資格を遵守して行けば、今後は新入会者がいないことになり、会は先細りとなりいずれは消滅の運命を迎えます。それも一つの選択ではありますが、可能であればこの会を存続させたいというのが大多数の会員のみなさまのお考えではないかと思います。現在の会則では、英国への留学経験者は誰でも、会員の推薦があり、役員会の承認を得られれば、会員になることができます。どうか周囲の英国留学経験者の方々をこの会へお誘い下さいますよう、お願い申し上げます。

このBCからの日本人への奨学金の打ち切りに対応して、BCJAが奨学金制度を立ち上げたことはみなさまご存じのことと思います。額としては少額ですが、BCからのサポートも得られることから、多くの期待を集めており、今年の応募者は100人を超えました。この奨学金制度は今年で3年目を迎えますが、規則上3年目を一つの区切りとして見直しをすることになっています。しかしようやく軌道に乗り、これだけ多くの方からの応募がある以上、この時点で、打ち切りにするのは適切ではなく、少なくとも今後何年かは続けて行きたいというのが役員会の見解です。この奨

学金は会員のみみなさまからのご寄付によって成り立っています。どうぞ今後もこの奨学金に対して、ご援助をお願いしたいと思います。また奨学金委員会では、さらに広く寄付を募ることも検討しています。BCJA奨学金について、ご意見をお持ちの方は、どうぞ会長あてにメールをお寄せ下さい。

われわれが英国留学した頃と較べても、世界は狭くなり、国際交流はますます重要となってきています。そのなかでBCJAが日本と英国の国際親善に果たすことのできる役割は決して小さくはないと思います。ぜひ会員みなさまのご協力により、少しずつでも日英の国際親善のために尽くして行きたいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

(東京大学大学院医学系研究科小児外科学教授)

会長メールアドレス: [HASHIZUME-PSU@h.u-tokyo.ac.jp](mailto:HASHIZUME-PSU@h.u-tokyo.ac.jp)

## 瀬川彰久 前会長の御逝去を悼んで

前々BCJA 会長 平 孝臣

BCJAの会長を2002年4月から1年間務められた瀬川彰久先生が本年4月16日にお亡くなりになりました。1953年生まれで、まだまだこれからという時期を考えますと運命の神様のいたずらに憤りを感じざるをえません。

彼との出会いは今から15年あまり前、ブリティッシュカウンシルのスカラシップ口頭試問会場で緊張と不安が入りまじった気持ちのひとときを待合室で一緒に過ごしたことから始まりました。今でもこのときの情景は映画の一コマのように思い出されます。留学から帰国後、お互いにブリティッシュカウンシルにお世話になった気持ちからながしかの恩返しのようなことができればと思い、BCJAの委員を務めさせていただきました。彼はBCJAの本の出版、Newsletterの編集、奨学生選考委員、そして会長職と、この10年あまりの間精力的に活動し、BCJAの発展に大きく寄与されました。その歯に衣を着せぬ言動は一部誤解をまねきかけないところもありましたが、基礎医学者としての精緻さと理論に基づき物事の本質を見抜いてのことで、私も大変勉強になったと感じています。

数年前に一時体調を崩されたとうかがいましたが、それを公には伏せながらの活動でした。本年3月10日の委員会で、やはり

健康上の理由ということを示せながら、奨学制度やさまざまな BCJA の問題に一定の方針を示された上で、会長の任を引くと  
言われたときには、これほど病状が進んでいるとは心にも思っ  
ていませんでした。おそらく医学者として御自分の病状を十分  
察知されていたのだと思います。その後たった1ヶ月あまり後に  
訃報を聞くようになるうとは思いませんでした。

ご家族は奥様と3人の幼い男児がいらっしゃると聞いておりま  
す。将来この息子さんたちが大きく成長されたときに、お父様の  
さまざまな足跡を少しでもこの BCJA Newsletter などでの活動  
記録から感じてもらえるようになればと思います。

ここに心から御冥福をお祈りいたします。

## BCJA 英国留学奨学金審査委員会からの報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会委員長 白鳥 令

2000年11月のBCJA年次総会で設立されました「BCJA 英国  
留学奨学金」は、会員の皆様のご助力とご指導で順調に募集を  
することが出来、9月のBCJA委員会にて2002年度の授与者が決  
定されました。

お一人当り英国留学のための旅費相当奨学金(15万円)とい  
うわずかな金額の奨学金であるにもかかわらず、本年度も41名  
という多数の応募者があり、しかもそれぞれが高度な学力と知識  
意欲的な計画の持ち主でありまして、審査委員会は非常に困難  
な選択を迫られました。

公正な審査の結果、British Council からのご援助もあり、添付  
別紙の通り、2002年度は10名の方々に BCJA 奨学金を差し上  
げることになりましたので、お知らせ申し上げます。

なお、選考に当りましては、英国留学で学ぼうとされている具  
体的な目標や計画が明確か、また、英語力も含め、英国での研  
究や勉学の準備は出来ているか、の2点を重視して審査致しま  
したことを付記致します。

なにぶんにもBCJA会員の個人的寄付に財源を依存している  
BCJA 奨学金であり、応募者に十分な援助をすることが出来ませ  
んが、今後も毎年この奨学金の募集を続けたいと考えて居ります  
ので、BCJA 会員の皆様にもよろしくご支援の程お願い申し上  
げます。

## 別表

### BCJA 英国留学奨学金2002年度授与者名簿

氏名	所属大学 (出身大学)	留学先研究機関	研究分野
青砥 厚二	文化服装学院	London College of Fashion	服飾デザイン
秦 邦生	東京大学	York	英文学
田崎 恵子	東京大学	University college London	中東欧研究
戸田陽一郎	一ツ橋大学	University of Sussex	経済学(地域発展)
井上 彰	東京大学(慶応大 大学)	LSE	政治学
迫 桂	東京大学(学習院 大学)	University college London	英文学
柳田 隆文	中央大学(一ツ橋 大学)	St. Andrews	環境政策
ダベンポート アンジェ ラ・キクエ	東京大学(ロンド ン大学・聖心女子 大学)	Oxford	英文学
関根 道和	富山医科薬科大 学	International Centre for Health and Society/ University college of London	保健医学
山口 武彦	大阪大学(青山学 院大学・東京大 学)	LSE	経済学

### 2001年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[3]

#### 私のイギリス時間 -- オックスフォードでの一年

多田 紀子

オックスフォードで学んだ一年間はかけがえのないものとなり  
ました。学業面では、チュートリアルという素晴らしいシステムで  
きめ細やかな指導をうけ、生活面では世界各国からの人々と交  
流する機会に恵まれました。

私は、早稲田大学からの交換留学生としてペンブローックカレ  
ッジ、そして現代史の学部にも所属していました。ペンブローックカ  
レッジは、古くは名言語学者サミュエル・ジョンソンも学んだ由緒  
あるカレッジです。道路を挟んだ向かいのジョン・ロックが学び、  
不思議の国のアリスの作者が教鞭を取ったクライストチャーチと  
比較するとこじんまりとした感がありますが、季節により様々な  
花々に彩られ、最もかわいらしく趣のあるカレッジの一つだと思  
います。ショッピングセンターや大きなバス通りのある忙しい町  
の中心部にありますが、一歩カレッジの中に足を踏み入れると  
そこには落ち着いた大学独自の世界が広がっています。私は、  
学部の一年生とファイナリストと同様に、カレッジの中の寮に住  
んでいましたが、地理的には図書館や他のカレッジ、そして多く  
の講義が行われるイグザム・スクールなど日常生活に必要な場  
所にはどこへでも歩いて行ける便利な場所にありました。また、

春には向かいのクライストチャーチの広大な庭で、勉強の息抜きに白鳥やカルガモの泳ぐ川沿いの散歩や芝生の上での読書、その向こうにある大学の植物園での散歩が楽しめました。

チュートリアルは、カレッジの中のチューターの部屋で行われます。フェローやプロフェッサー専用の建物の中は薄暗く、壁はウィリアムモリスを思わせるようなイギリスらしい壁紙の上に、歴代の先生方の肖像画が掛けられており、ぎしぎしと音のなる古い木でできた階段を登ってチューターの部屋へと向かいます。私のチューターの部屋は最上階の屋根裏部屋のようなところにあり、身をよじらせなくては上れないほどの細い階段を一步一步踏み外さないように気をつけなくてはなりません。毎回不安や期待、そして反省や満足感など様々な思いでその階段を昇り降りしていました。

チュートリアルのスタイルは先生によって異なりますが、私の場合チューターと一対一で行われました。オックスフォードの伝統どおり、毎回あらかじめ指示された本を参考に書いたエッセイをチューターの前で声に出して読み上げ、その一文一文についてチューターが細かくコメントを下さり、そこから議論が展開されます。私は、主に十九世紀から二十世紀前半にかけてのイギリス社会史を学習し、最後のターム、トリニティ・タームにはイギリスにおけるマスメディアのイデオロギー的影響について歴史的観点から論文を書きました。実際に現地では生活する中で見えてくる社会的特徴の歴史をたどることは大変興味深いことで、また毎回学問の奥の深さを改めて実感していました。今の学部でこのように世界での学問の厳しさを知ったことは必ずこれから生かして行かなくてはならないと思います。

オックスフォードでは、レクチャーはチュートリアルや自分の研究の参考と考えられており、それ自体が目的ではありません。私自身も、日本でのように決まった講義に毎週何時間というように出席していたわけではなく、チューターから指示されたものと、学期の初めに配られるレクチャーリストを見て関心があるものに出席していました。セミナー以外のものには誰でも自由に出席できるというところにその利点があったように思います。

リサーチには、カレッジと現代史の学部の図書館、それから大学のボードリアン・ライブラリーを利用していました。カレッジと学部の図書館は開架ですが、ボードリアンは閉架のため、請求した本や資料が手元に届くまでに最低四時間程、かかるときには一週間ということもあり、決して使い勝手が良いとは言えませんが、蔵書量はイギリスで出版された本は大英図書館とケンブリッジとともに全て所蔵しているだけあって、比類のないものでした。また、ブラックウェルズという、ボードリアン・ライブラリーの向かいにあるオックスフォードで一番大きな書店も素晴らしく、本の場所を尋ねると一瞬のうちに書架まで案内してくれましたし、中には、本を購入すると、わざわざ棚まで一緒に戻って関連の他の本についても解説し、その時代的背景について語ってくれる店員の方もいたほどでした。商業的な本の販売とは違った見方には考えさせられるところがありました。

また、日々の生活には常に新鮮さがあり、特にカレッジのダイニングホールやカフェでの友人達とおしゃべりはかけがえのない楽しみでした。オックスフォードにはイギリス人だけでなく、世界各地からの留学生が集まっており、簡単に思い浮かべてみるだけでも二十か国以上、オーストラリア、デンマーク、中国、フランス、ブータン、マレーシア、ロシア、イタリア、パキスタン、アメ

リカ等様々な友人達との交流の機会がありました。ダイニングホールでは、日常の話から、相互の国の文化の話、ときに白熱した政治討論など様々な会話が繰り広げられていました。様々な専攻や学年、国の学生が常に交流し、意見を交換し合える場があることは、オックスフォードの素晴らしい面の一つだと思います。また、ペンブローックカレッジにはジャパニーズ・スタディーズがあり、日本について学習する友人達と交流する機会にも恵まれました。毎週イギリス人の先輩を中心にパブやインド料理店に集まり、日本とイギリスの文化について日本語と英語で話し合っていました。イギリスの友人達の日本に対する理解の深さに毎回驚かされるとともに、日本を外から見る視線を学ぶ貴重な体験をしたように思います。才気煥発な彼等彼女達から学ぶことは数知れずありました。

つらい時期もありましたが、チューターやジャパニーズ・スタディーズの先生がまだつたない英語力に悩みつつ日々奮闘していた私を常に温かく見守ってくださったこと、また、周りの友人達も同じように、あるいはそれ以上の課題に常に取り組み、互いに励ましあえたことが大きな支えとなり、頑張り続けることができたのではないかと思います。そして、留学生仲間や日本人の先輩達、そして日本にいる家族や先生、友人の励ましにも支えられ、周囲の人のありがたさについてもこの留学を通して学んだように思います。

一年間という短い期間にできることは限られていましたが、その中で得たことはかけがえのないものでした。これを一つのステップとして、学業面も語学面においても今後も積極的に努力してゆきたいと思います。また、日本とイギリス、そして世界各地にできた友人達の国をはじめとする様々な文化との良い架け橋となるよう心がけてゆきたいです。ブリティッシュカウンシルから奨学金を頂いたことは大変名誉なことであり、同時にありがたいことでもありました。これからも、支えてくださる方々のありがたさを一つの励みとして進んで行きたいです。

(2001年度BCJA 奨学生、University of Oxford, 社会学)

2001年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告[4]

## To BCJA, Report of my study in UK

Chin-yen Wang (王 鉄彦)

I am 2001 Scholar Chin-yen Wang, first I have to apologize that my report is a little bit late. I was graduated in UK at Oct 2002, and was supposed to return to Japan at that time, but because I was failed in applying for a dormitory in my university, and I didn't have the money to rent a apartment outside, so I decided to take another half year off, so that I can apply for dormitory again the next semester. Luckily I succeed, and have flied back to Japan on 31 March, 2003. During this half year, I have been stay with my friends in Germany, and have learned German language, which is very helpful to my legal studies.

My study in UK was very wonderful. It is a true international environment. I have many classmates from all over the world, many of them are English native speakers. Therefore, it was difficult for

me to compete with them. However, learning, speaking and writing in English is a very good challenge to me. I remember when I had to write my first essay in English, it was really very stressful, and very difficult. However, as time goes by, I am able to write legal essays in English more and more easily. At the end of the year, I was able to undertake research in English, write a dissertation of 15000 words, and successfully obtained the Master of Law degree in April 2003. However, in terms of listening and speaking I think I still need more time. Especially my Greek classmates, although their English is excellent, have special Greek accent. I was really frustrated that, at the end of the year, I was still unable to understand one of my Greek classmate's question in the classroom !

During my study in UK, I also have met many Japanese students. For me, I have studies in Japan for 3 years, so that to me Japanese people and Taiwanese people are the same -- it seems to me that they are all of my own countries. I had some complex with Chinese students, whose government threatens Taiwanese people with fear of war. But without political issues, they are very nice and give me many help. Many of my Japanese friends in UK were at first surprised that I can speak their language, and I had a great fun surprising them. Later I found that it is really important to know foreign languages, it enables you to know more nice people which you might not be able to if you don't speak their language. I know so many nice Japanese people in UK. This experience also contributes to make me to learn German language later.

After all, my study in UK is really an excellent experience. I wish I could repeat it again. Now every time when I watch BBC news, I feel very familiar, very "at home", and feel that the experience in UK is a part of my life. To me, UK is as Japan, has become my third home country, except when I have to experience many inconvenience when I need to apply for a visa to enter UK. As a national from a developing country (despite Taiwan has joined WTO as a developed country), I really appreciate BCJA and British Council to grand me the opportunity to receive higher education. I have learned a lot and hope I can do more contribution to Japan and UK in the future. I also hope that in the near future Taiwanese people will not be required visa simply for political reason (there are many counties in the world which are less developed than Taiwan but can travel around the world without visa requirement), and I hope that the world will be more peace, more integrated, less war and less violence.

(2001 年度 BCJA 奨学生、University of Essex、国際法)

## 夏ロンドン - UCL へ homecoming

島岡 丘

1960 - 61 年が私の最初の British Council Scholar でしたが、もうすでに 42 年間の年月が経ってしまいました。その間、自分の専門が英語音声学と英語教育でしたので、筑波大学の 22 年間とその後の私立大学の勤務期間は専ら その方面の研究と教育に過ごしてきました。同じことをやっていると言われたいとおそれがあるので、今年はロンドン大学で毎年行われている英語音声学夏期講座に参加してきました。以下その時の様子をご報告をさせていただき、何かのご参考にしていただければ幸いです。

今年のロンドン大学で行われた英語音声学講座はすでに第 19 回目だそう で、来年は第 20 回目を迎えることになります。日本の猛暑を避け、避暑の気持ちで気楽に参加した人もおりましたが、講義は誠に充実していました。毎朝 9 時から講義が始まり、午後は 4 時頃まで続きます。途中で個人指導 (tutorial) があり、小グループで徹底的に個人個人の英語の発音の矯正が行われました。

参加者は世界各国から来ていましたが、この数年間は日本からの参加者が最大で、まさに Japan as No.1 です。今年は 120 名が参加しましたが、そのうち日本からの参加者が 66 名で最大の集団でした。

日本人の英語力は国際的にみて低いということがマスコミなどで喧伝されていますが、現状を少しでも向上させたいという熱意の萌芽が日本からの参加者にみられるようでした。英語力を向上させるには、聞き取り、読解、作文、音声表現の 4 つの技能が必要ですが、その基礎は音声体系の修得と考えられます。ロンドン大学ではこれまでの伝統から、綴り字よりは音声を IPA で表記することに重点をおき、発音記号を書くことを必須としています。中国で使われている英語のテキストは、複雑な英語の綴り字を読みとらせるために第 1 巻の最初の段階では発音記号を徹底して覚えさせるように編集しているようですが、英語の学習には発音記号約 50 種を徹底して覚え、発音記号を見ればどのような新出語も自信をもって読みとれるという学習態度を作ることが必要と考えられます。そのためにはカタカナに工夫を凝らして「近似カナ表記」を補助記号として使うことも考えてもよいと思います。日本は漢字文化圏であり、聴覚に頼るよりは視覚に頼る傾向が強いようで、文字上区別できれば音声はあいまいでも何とかかなという都合の良い解釈が横行しているようですが、これでは国際的に通用する力になりません。

British Council のおかげで、音声の専門家を私の関係する学会だけでも、マンチェスター大学から Alan Cruttenden 教授、ロンドン大学 SOAS から Barbara Bradford 教授などの来日が実現し、英語の先生方の音声面の向上にたいへん役立ちました。そのような専門家を迎える受け皿として、英語発音表記学会、エリック同友会音声指導研究会など今後の活動に期待しています。

(SHIMAOKA Takashi, 聖徳大学人文学部、University College of London 1960-61)

野間 和子

BCJA の皆様こんにちは、

地球温暖化のせいでしょうか、今年の英国は10月はじめ頃までお天気がよく温暖な日々にも恵まれました。このところ急に冷え込んできましたが、例年に比べると雨が少ないので、珍しく秋の色を楽しむことができます。こちらの人たちは「春は桜」、「秋は紅葉」と大騒ぎする日本人ほど季節の変化に敏感ではないらしく、太陽が燦爛と輝いていることこそが一年中最も喜ばしいことのようにです。

私は今年6月より、Winchester という古い都から8マイル程南にあるChandlers Fordという町に住んでいます。長年勤めた四国学院大学を3月で辞め、夫と生活をともにするために渡英いたしましたので、これまでの留学や研究を目的にした滞在とは少し状況が異なります。私の英国とのかかわりは18年前、1984年にBritish Councilの奨学金によりReading 大学大学院言語学部で留学したときに始まります。1998年には研究のため1年間を再び英国で過ごしたとはいえ、最初の留学時から18年を経て、この地で生活することになるとは夢にも思いませんでした。ただ、留学当時専門の応用言語学以外にも英国の歴史や精神文化を勉強する機会に恵まれ、将来は日英両国に関わる仕事をしたいと願っていましたから、日本でのしばらくの仕事の後、今度は英国に滞在する時がきたのかも知れません。現在は得に大学の研究室には身を置かず、1 - 2年は研究休暇と勝手に決めて、読み書きを楽しみながら、まずゆっくりと土地と人になじむことを大切に毎日を過ごしています。夫が英国籍ですから色々助けてもらえますし、それほど苦労はないはずなのですが、それでも半年の間には様々な失敗、挫折もたくさん経験いたしました。また日本のある種の便利さに慣れているため、戸惑うことも多く、平常心で過ごせない日もあります。現在置かれているところで自然に私を生かされるように少しずつ自分を整えていきたいと願っています。

まだ英国の何かについて語る資格はないので、今回は私の小さな体験を英国のひとつの姿としてお伝えすることにします。遠くで暮らす夫の母が倒れて病院に運ばれたのは私が渡英してまもなくのことでした。その後、ソーシャルワーカー、精神科医、GP (General Practitioner) の3者会議が何度も行われた後、ナーシングホームに入る事が決められました。老人ホームは2種類に分かれていて、特殊な医療行為を必要としない人たちはResidential Home、24時間の医療行為を必要とする人たちはNursing Home を選びます。ひとつのホームのなかに両方の機能を備えたところもあり、義母がはいることになったのもそのひとつで、彼女はNursing Care Unit にゆだねられることになりました。この国では何らかの障害があったり、高齢で生活に不便があったりする人は誰でも専門のソーシャルワーカーに担当してもらえます。義母を担当してくれた人は大変有能で私たちは助かりました。彼女が2つのホームを選んでくれましたが、規模の小さい家族的な施設を勧められ、私たちもそちらにお願いするつもりでしたが、そのホームの担当者が面接をしたところ義母は痴呆が始まっているから受け入れられないと言われました。いわゆる老人性痴呆症の場合は特殊な施設でないと無理なのです。

EMI (Elderly Mentally Incapacitated) という用語を夫も私も知りませんでした。幸いなことに再検査の結果通常のナーシングホームで受け入れられるという判断が医療者間で下され、希望の施設に入れることになりました。その費用をどうするかということですが、本人の財産が1万9千ポンド以下ですと公費でまかなわれます。それ以上持っている人はほとんどを自分で賄わなくてはなりません。財産のなかには不動産も含まれますから大抵の人が家を処分してその費用に当てるようです。子供がお金持ちであるとかないとかは関係ないのです。あくまで本人名義の財産のみが対象となります。義母の場合必要な費用の半分は家を売却したもののなかから賄うことになりました。幸いなことにこういう場合を対象にした保険があり私達も義母が長生きする場合を想定してそれに加入しました。現在家の売却の途中ですがそれも細かいことは保険会社に任せましたので今のところ順調に進んでいます。ここまですべて私達夫婦できめながらすすめてこられたのは、母がまだもう少ししっかりしていた時に、ソーシャルワーカーの勧めで夫がPower of Attorney (全権代理人)として登録を済ませていたからでした。それが出来ていなかったら何倍もの時間とエネルギーを必要としたでしょう。私は日本人なので、義母をホームに入れることには少なからず抵抗があったのですが、この国ではそれが当然のことと受け止められており、また専門の医療が必要な義母には最善の道であると納得しました。義母はまだそれほど高齢ではないので私達は大変不用意であったにもかかわらず、短期間でここまで漕ぎ着けられたのは英国の福祉政策に負うところが大きいと思います。

このことを通して日本の老人福祉に思いを馳せました。歴史も社会の基本理念も違いますから安易に比較は出来ませんが、英国ではこの国に生まれてきた一人一人が、福祉を最後まで受けられる社会が前提になっていると思います。貧富の差に関係なくその人の基本的な人権が実際的に守られていることを目の当たりにしました。

日英両国の間で考え、時に行動し、自らに問われていることに答え続けることにより、British Council から全額給付で留学させて頂いたことに少しでも報いる者でありたいと願っています。又お便り差し上げます。

皆様の新年が祝福に満ちた時でありますようにお祈りいたします。

(NOMA Kazuko, University of Reading 1984-85)

## BCJA ホームページのアドレス変更について

編集部

前回のニューズレターでご案内いたしましたBCJAのホームページについて、ドメイン名bcja.netを新たに登録して、次のようにアドレスを変更いたしました。URLは、<http://www.bcja.net/>となっておりますので、ぜひ一度ご覧下さい。なお、ホームページの移設に伴い、1ヶ月ほど機能を停止させました。大変ご迷惑をお掛けして、申し訳ありませんでした。

過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。なお、一部の機能は、まだ準備に時間がかかっており、もうしば

らくお待ち下さい。それから、BCJA 英国留学奨学金の募集に際しては、British Council のご好意により、UK NOW、British Council の Top ページからの Link を時限で設定させていただいております。

今後、さらに内容を充実させて行きたいと考えておりますので、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せいただければ幸いです。(メールアドレス [m-aoyagi@aist.go.jp](mailto:m-aoyagi@aist.go.jp) まで)

#### [編集後記]

まず初めに昨年12月に発行予定の18号が遅れに遅れで、今年6月に19号との合併号として、発行することになってしまったことを深くお詫び申し上げます。原稿をお送りいただいて、発行をお待ちいただいていた寄稿者の皆さまには、大変ご迷惑をおかけしました。なにぶん、昨年まで複数体制だった編集作業が、単独になってしまい、それと、個人的に非常に多忙な状態が重なってしまい、身動きとれない状況でありました。

今後は、発行の頻度を年一回に減らすこともいたしかたないと思っております。しかし、これを補完する形で、ホームページの機能を有効に活用して、適宜、最新ニュースを掲載して行き

たいと思いますので、皆さまからの情報提供をよろしくお願いいたします。

2003 年度の BCJA 英国留学奨学金につきましては、応募が終了して、今年度の審査に進められているところですが、これまでの奨学金を授与された方々からの近況報告を2件掲載させていただきました。

本レターをますます充実させたいと思っているところですが、そのためには、皆さまからの積極的な寄稿が不可欠です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。なお、本ニュースレターについては、前回に引き続き BC の國村三樹さんに発送をご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

最後に、追悼文にもありますようにニュースレターの編集長、BCJA 会長を歴任されました瀬川章久先生が4月にご逝去されました。先生のご功績に感謝し、深く哀悼の意を表したいと思います。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, [m-aoyagi@aist.go.jp](mailto:m-aoyagi@aist.go.jp))